

三木町まんで願いきいきパーク(仮称)

整備基本計画



平成29年3月 三木町

■三木町まんで願いきいきパーク(仮称)整備基本計画

1. 施設の基本的な考え方	1
1-1 施設の目的・コンセプト	
1-2 子育て支援総合拠点としての基本方針	
1-3 施設機能の概要	
1-4 計画地の概要	
2. 各機能の事業内容	6
2-1 子育て支援機能	
2-2 サードプレイス機能	
2-3 交流・コミュニケーション機能	
2-4 子育て支援総合拠点としての将来方向	
3. 施設計画	10
3-1 敷地利用計画	
3-2 諸室構成	
3-3 平面計画イメージ	
3-4 利用イメージ	
4. 運営計画	17
4-1 運営方針	
4-2 運営体制	
5. 事業スケジュール	21
5-1 施設整備スケジュール	
5-2 運営体制整備スケジュール	
資料 用語解説	23

三木町まんで願いきいきパーク(仮称)整備基本計画

1. 施設の基本的な考え方

1-1 施設の目的・コンセプト

(1) 三大基本目標による「新しい価値の創出」

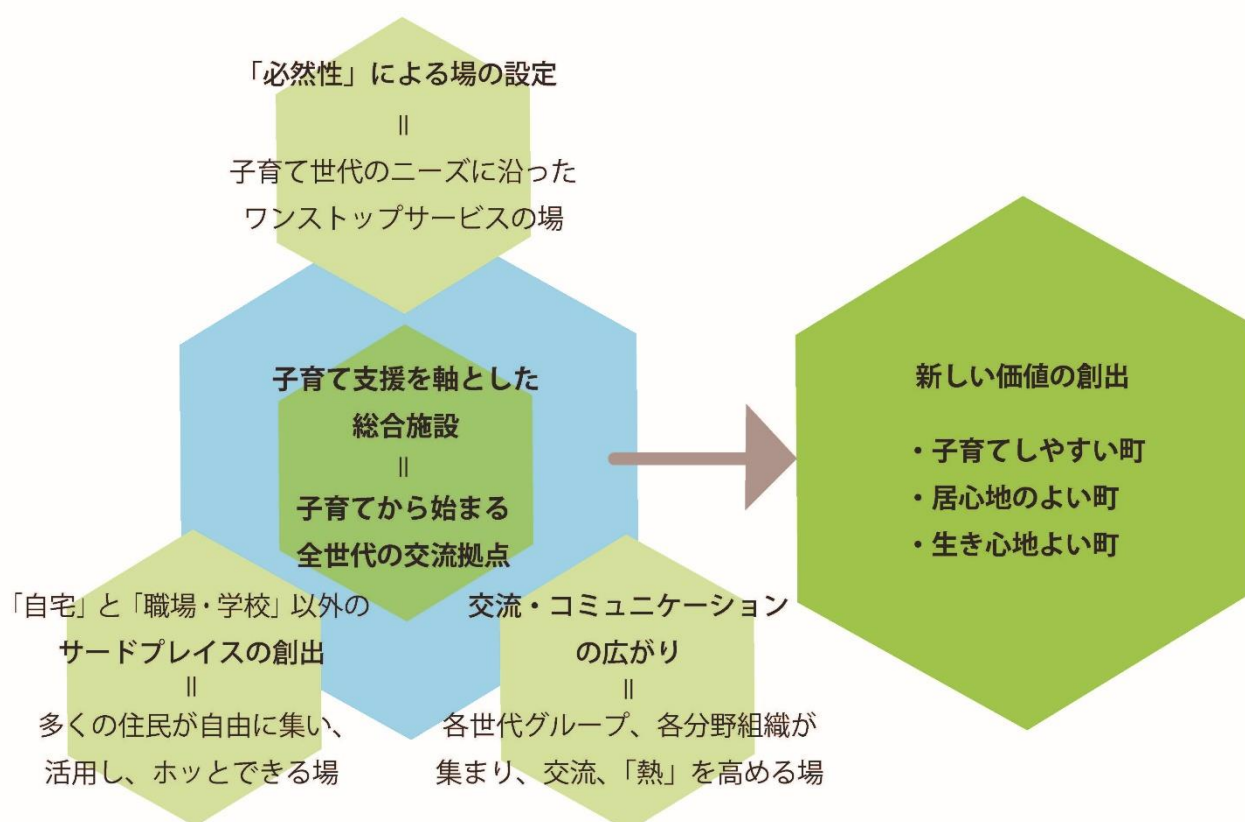
本施設は「三木町まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成27年10月）」において、住民全体で共有し、実行していくための計画とされる「まんで願いきいきタウン構想」の第1の構想を具現化するものである。（第2の構想は「健康寿命の延伸」）

同構想では、「子育て支援を軸とした総合施設」として、三つの目標を実現することとしている。

- ❶ 子育て世代のニーズに沿った「ワンストップサービスの場づくり」
- ❷ 多くの住民が自由に集い、活用し、ホッとできる「サードプレイスの創出」
- ❸ 各世代グループ、各分野組織が集まり、交流、「熱」を高める

「交流・コミュニケーションの広がり」

この三大基本目標の実現により、「子育てしやすい」「居心地のよい」「生き心地よい」町をつくり、三木町に新しい価値を創出することが目的である。

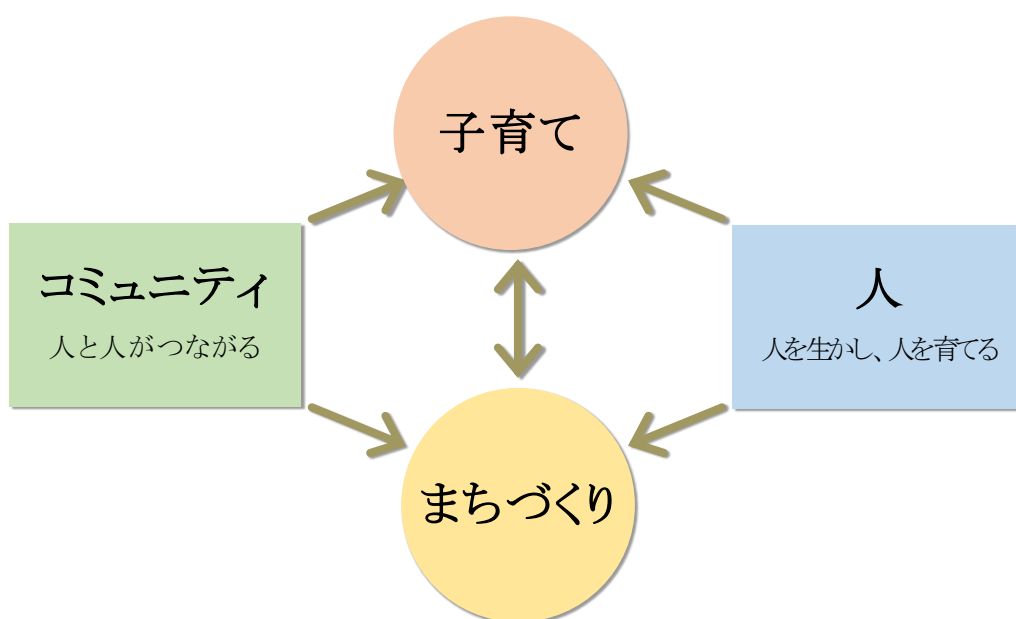


(2) 基本コンセプト——人とコミュニティが支える子育てとまちづくりの拠点

計画の最大で独創的な特徴は、子育て支援の総合拠点であると同時に、ここに多世代、多分野の人が集い、交流することで、訪れた人みんなが自然と“子育て”にかかわることができる場所にある。それが、本施設から地域へと広がり、コミュニティを育み、コミュニティの質を高めることを通じて、三木町の地域価値に新しい展望を拓くことを目指すものである。

「子育て」「サードプレイス」「コミュニティ」の三要素を備えつつ、それら各要素が別々ではなく、双方向でつながり合うことによって、各要素の効果が高まることをねらいとする。

この場を通じて、人を生かし、人を育てる、そして人と人がつながり、強いコミュニティができて、その人とコミュニティが子育てとまちづくりを支える場となることが期待される。



(3) 誰でもいつでも自由に入出入りできる「自由空間」

本施設の目的を達成するために、利用者を限定することなく、開館時間内は自由に入出入りや利用ができる場とする。

なお、土日・祝日も開館し、休館日は平日に設定する。また、飲食が交流や憩いを促すことから、自由に利用可能な場所では飲食ができることとする。

1-2 子育て支援総合拠点としての基本方針

(1) ワンストップ相談サービスの場

三木町は子育て支援のトップランナーとして、妊娠から出産、子育てまでの切れ目のない支援を行い、子育て家庭を応援してきたが、これまでの取組みも認知度が低かったり、利用が少なかったり、そして何より、住民みんながその取組みを知り、地域で子育てを応援する環境には至っていない現状にある。

すぐには、本施設にすべての機能を集約することはできなくても、すべての子育て支援情報を集約し、一元化することで誰にとっても分かりやすい場とし、子育て支援のあらゆるニーズにワンストップで対応する。

(2) 子育てコンシェルジュの育成と配置

子育てには多くの知恵やノウハウ、そして支援者、支援機関が必要とされるが、いつ、どんなときに、どこに頼れるのかが分かりにくいのが現状である。また、頼れる場が身近な所や、日頃出入りしている所にないと、実際には役に立たないこともある。

ここでは、妊婦・産婦の体調、授乳、子どもの世話、食事、遊び等の妊娠から出産、子育てにかかわるすべての相談に応じられる人材とスペースを配置する。

(3) ネウボラ機能—妊娠・出産から子育てまでの「切れ目ない」支援

「ネウボラ」とは、フィンランド語で「アドバイスの場」という意味で、全国各地でモデル事業が取り組まれており、三木町においても、「保健師＋子育てコンシェルジュ」が「ネウボラパートナー」として、妊娠から出産、小学校入学まで、継続的に相談でき、必要な支援につなげる仕組みを構築する。

ここをネウボラ拠点とすることで、住民みんなによく知られる場となり、妊娠したら誰もが気軽に訪れて「ネウボラパートナー」とのおしゃべりを通して不安を解消できるなど「三木町版ネウボラ」を実現する。あわせて助産師の派遣、小児科医や大学病院との連携等ネットワーク化を進める。

(4) 「遊育」機能の創出

「困ってからのサービス」以前に、日常のコミュニティのなかで支え合える環境を整えることが終極の目標であり、そのために効果があるのは、「遊び」「楽しさ」がいっぱいあふれた、自然と人々が集まる場を創り出すことだと考える。

これまでは脇役的な扱いとされることの多かった「子ども遊び場」を主役の部に位置づけて、屋内・屋外一体となった遊びを通じた発達、学び、親子や多世代との交流の場を設けることで、子育て支援の新しい柱を創出する。

1-3 施設機能の概要

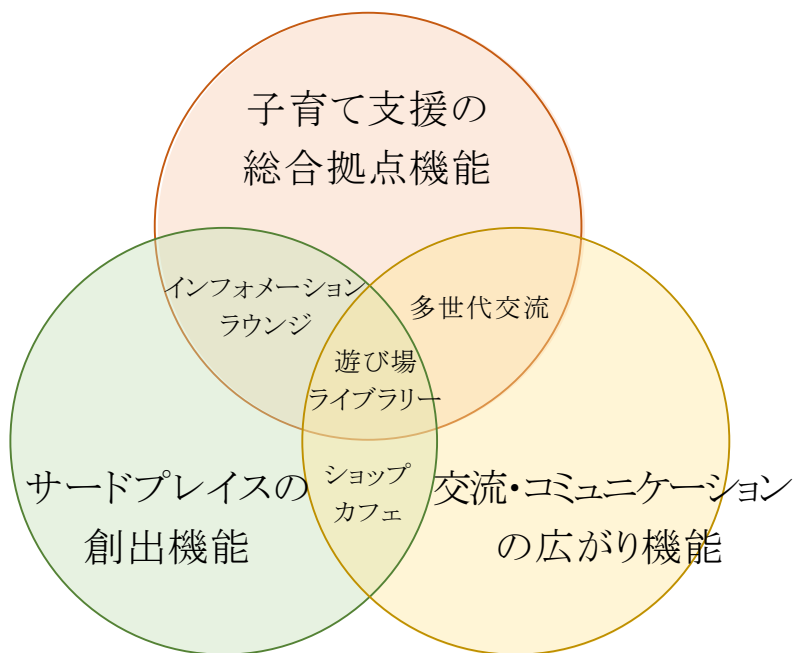
複合機能構成のイメージ

(1) 機能構成の考え方

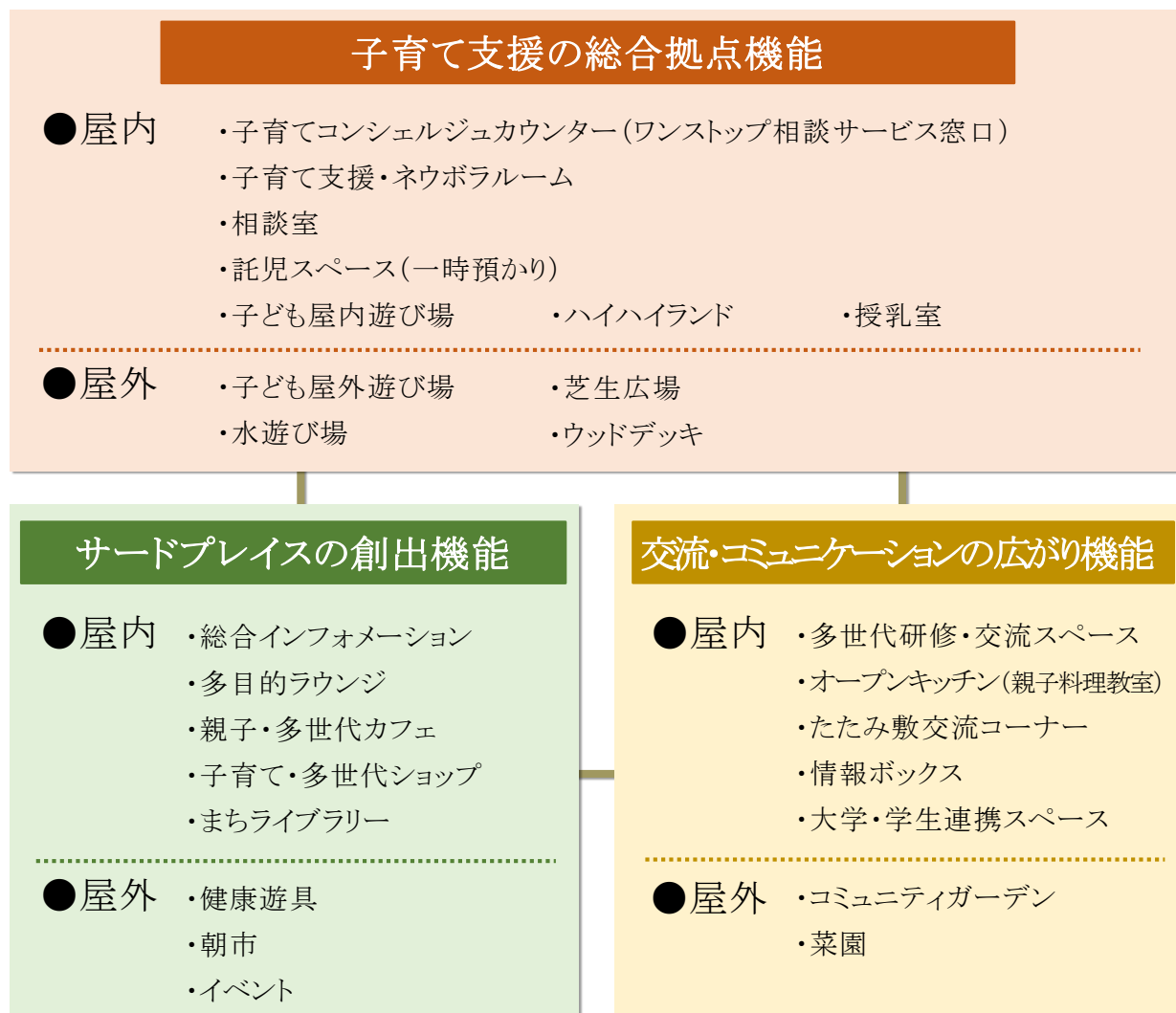
基本コンセプトで示した三要素から、本施設の機能には、「子育て支援」「サードプレイス」「コミュニケーション」の三機能が求められる。この三機能には、それぞれが独立している部分と、重なることによって相乗効果が期待できる部分がある。

その意味では、施設全体が「複合機能構成」により成り立っていると考えられ、実際の使用形態としては、機能別に分類されるものではない。

そのような機能構成であることを前提として、主に三機能に必要な施設内容を整理する。



(2) 施設機能



1-4 計画地の概要

(1)所在地

三木町大字下高岡字新開

(2)敷地面積

約6,700㎡（将来拡張可能性有）

(3)都市計画

用途地域指定なし、防火地域指定なし、建ぺい率70%、容積率200%

(4)周辺道路

敷地のほぼ中央南部に幅員6m町道で主に接道

主要地方道高松長尾大内線（幅員約20m）より、6m道路で約15m入る

(5)主なアクセス

- ・鉄道 ことでん長尾線「白山駅」より約800m
- ・車 主要地方道高松長尾大内線より南へ約100m



2. 各機能の事業内容

2-1 子育て支援機能

既存機能や関連機能が町内に多くあるなかで、まず「新施設」としての存在意義を改めて整理し、総合的に達成すべき機能を明確にする。

主な施設機能は以下のとおりとする。

(1) 相談・情報一元化

町内の既存施設と機能を含め、子育てに関する情報が一元化されることによって、すべての子育てに関する相談に対応できるとともに、ワンストップサービスが実現するよう、子育て情報の集約・発信機能、オープンなインフォメーション窓口を兼ねたオフィス機能と相談機能を備える。

(2) 三木町版ネウボラ拠点

三木町には保健師、助産師、保育士、栄養士等のサポート体制がすでに充実しており、それら既存サービス機能を活用する拠点として、「保健師＋子育てコンシェルジュ」が妊娠から出産、小学校入学前までの子育てについて、継続して相談や支援ができるネウボラ拠点を設ける。

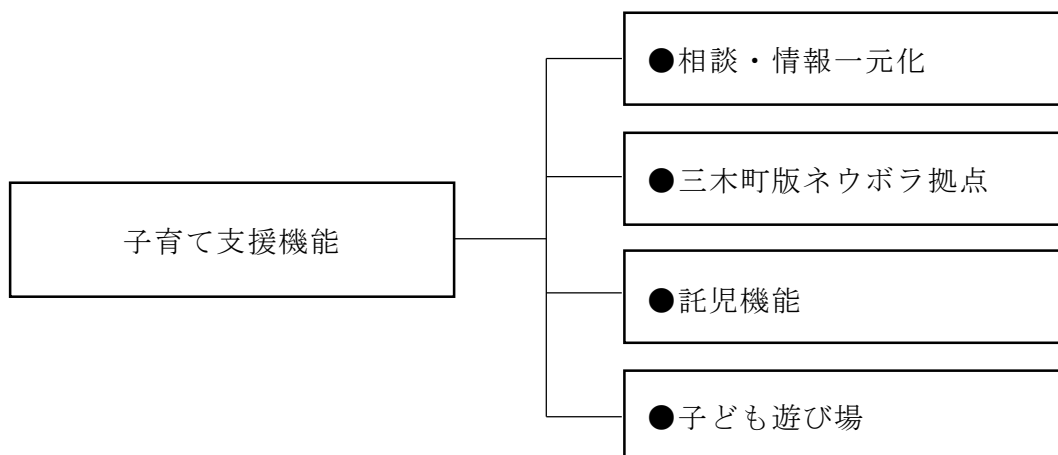
(3) 託児機能

乳幼児一時預かりサービスへのニーズが強いことから、スタッフが身近に対応できる所に、十分な広さの託児スペースを確保する。

夜間の一時預かりサービスとの一体化による効果も期待できることから、既存施設との連携・集約化を含めた託児機能のさらなる充実を目指す。

(4) 子ども遊び場

いつでも自由に出入りしたいとの希望が強いこと、子育て世代だけでなく多世代交流の場としたいこと、さらにはシニアを含むボランティア（保育士等の専門能力を備える人を含む）の管理・運営に対する参画意欲が強いことから、施設全体のなかで中心性、交流性を兼ね備えた場とする。



2-2 サードプレイス機能

子育て支援機能をサポートし、より強める役割を果たすとともに、多くの人にとっての「新しい行き場」「居場所」となることで、ここでの出会いや交流の広がりが、人を育て、人とのつながりを強め、ひいては町の発展基盤となるコミュニケーション機能の充実、強化につながる大切なことだと考える。

そこで、効果を発揮するのは「遊び」「健康づくり」「飲食」「買物」「学び」といった、日々のライフスタイルを豊かにする機能で、町内に不足しているものの充足だけでなく、快適で居心地が良いといった「行きたくなる空間」もあわせて創り出すこととする。

主な施設機能は以下のとおりとする。

(1) 多目的ラウンジ

いつでも、誰でも、自由に利用でき、自然に人との出会いがあるなど、オープンな場とする。施設の入口付近は、リラックスして談話、相談、読書、休憩等多目的に使える場とする。

(2) 親子・多世代カフェ

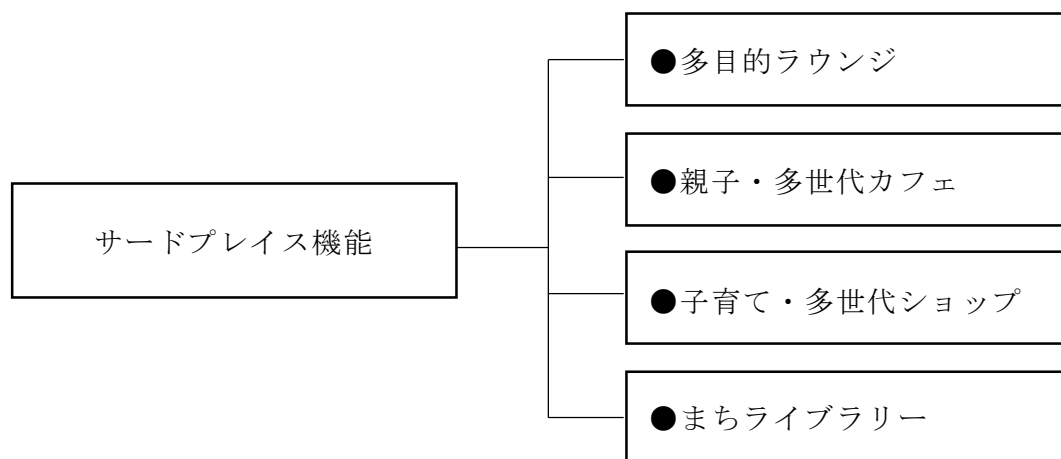
子どもと一緒にでも利用しやすく、同時に多世代が利用できるコミュニティカフェ機能を持ち、一人でも、また親同士でのお茶会や食事会等でも使い勝手の良い場とする。

(3) 子育て・多世代ショップ

子ども図書や絵本をはじめとした「子ども良品」が揃うとともに、多世代に対応した生活雑貨や子ども用品のリサイクル交換等の機能もあわせ持つ。

(4) まちライブラリー

子ども図書コーナーと兼ねて、「おすすめ図書」を持ち寄る参加型の図書室づくりを進める。あわせて、多世代交流ともなる「読み聞かせ」機能を備える。



2-3 交流・コミュニケーション機能

多世代がともに学んだり、得意分野を生かすリタイアコミュニティやアトリエ・ギャラリー、また大学連携による共同事業等の多くの機能が考えられるなど、特定するより、可能性を大きくすることが必要と考え、会議・研修室の他はできる限りフリースペースとして多世代交流の場を十分に確保する。

主な施設機能は以下のとおりとする。

(1) 多世代研修・交流スペース

テーブル・イスやたたみ敷での利用、また自由フロアとしての利用等、多用途に使える場として、小学生から中高生、大学生、シニア等の個人やグループが時間帯、曜日等に応じて交流企画を展開する。

(2) オープンキッチン

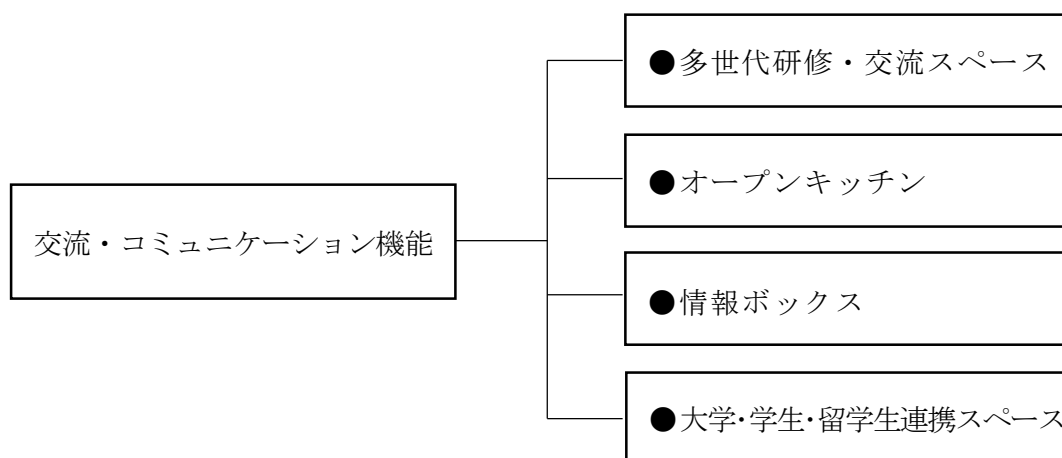
食育のニーズに対応して、日常的に自由に使える場とするとともに、菜園で収穫した野菜を調理して食べる場や、親子料理教室、食事会等の企画を立てて自主事業としても展開できるキッチンとする。

(3) 情報ボックス

様々な分野の団体やグループ等の活動紹介や、活動への参加機会づくりの場として、情報ボードやパソコン等を設置して、情報の受発信ができるようにする。

(4) 大学・学生・留学生連携スペース

香川大学の情報コーナーを設置するとともに、希少糖や子育て、健康づくり、食育、介護等をテーマとした講習や相談会、親子教室等の多様な大学連携事業を展開する。



2-4 子育て支援総合拠点としての将来方向

本計画では、計画している施設や機能以外の母子保健及び子育て支援に関する既存施設については、当面、現在地で機能を果たしつつ、本施設においては「情報一元化」による効果的な「ワンストップ相談サービス」を重視するのが現実的と考えている。

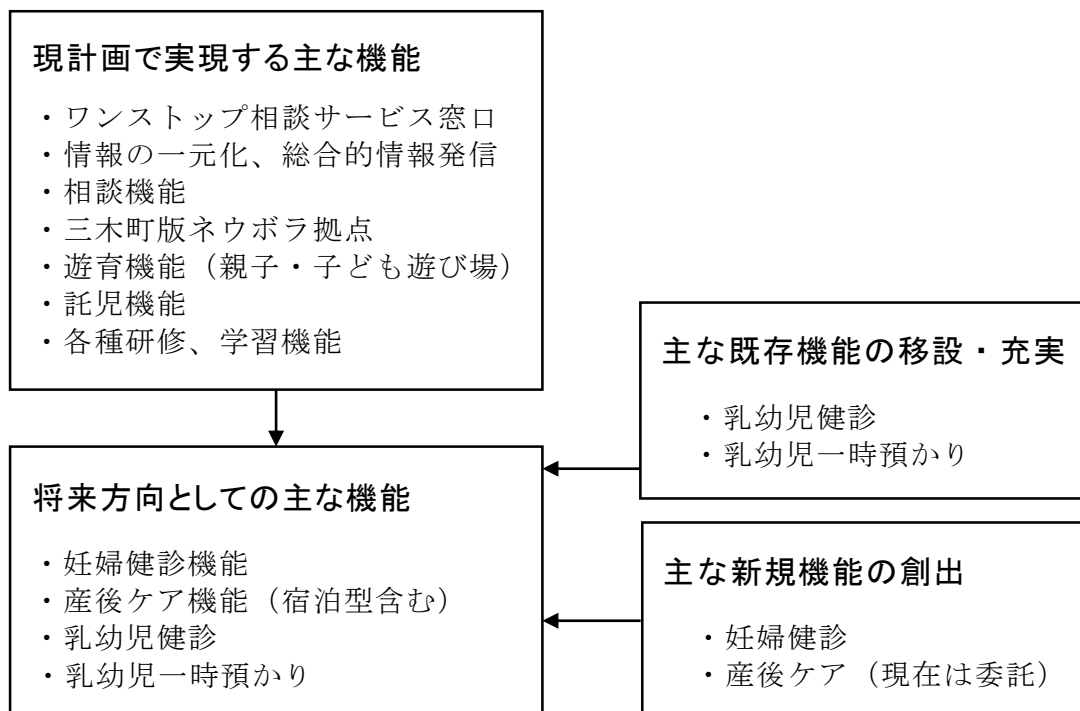
しかし、将来的には、計画地の拡張を含めて、可能な限り母子保健及び子育て支援に関する施設や機能をここに集約していく方針をもってあたる。

(1) 将来、計画地に集約すべき主な施設・機能

- ・ 妊婦健診実施機能
- ・ 宿泊を伴う産後ケア機能
- ・ 乳幼児健診実施機能
- ・ 乳幼児一時預かり機能の拡充整備

(2) 将来方向を実現するための方針

- ・ 母子保健及び子育て支援に関する行政機能のうち、必要機能の移転・集約
- ・ 香川大学医学部附属病院、香川県助産師会等関連機関との協力・連携の強化、調整
- ・ 既存施設の利活用方法の検討と再利用・整備
- ・ 妊婦健診、産後ケア等ニーズの把握とニーズに対応する施設機能の設定
- ・ 計画敷地の拡張による用地の確保、建物整備



3. 施設計画

3-1 敷地利用計画

全体としては、開かれた「自由空間」「広場の中に木のぬくもりが感じられるあたたかい建物」という空間を基本方針とする。

(1) 施設建物の集約

機能ごとに建物を分棟にする考え方についても検討を加えたが、多世代の自然な交流が生まれにくいこと、各棟に人員の配置が必要となること、建設コストが高くなることなどから、建物は集約して整備し、以下の方針をとることとする。

- ❶ できるだけ広々と、自由な動線が確保できる屋外空間
- ❷ 各機能が双方向で相乗効果が生まれるような利用形態
- ❸ 単一目的での利用に限定せず、多目的な利用を重視
- ❹ 多世代交流・コミュニケーションの機会が最大限増える場

(2) 段階的整備の可能性

将来的に拡張、増築の可能性は残し、そのための配慮をした敷地利用とするが、基本機能が一通り揃ったスタートとする。その理由は以下のとおりである。

- ❶ 偏った機能のみでは、当初の「まんで願いきいきタウン構想」の子育て世代のニーズに沿ったワンストップサービスの場、子育て支援を軸とした総合施設という趣旨及び目的には合致しない。
- ❷ 三要素（子育て・サードプレイス・コミュニケーション）が複合機能化するところにこの施設の存在意義と他にはない独自性が認められる。
- ❸ 単一機能のスタートでは、利用者の広がり期待しにくく、管理面でも不経済である。
- ❹ 順次工期を分けて建設する方法は、敷地が「常に工事現場化」するため、利用者の安全性、快適性が担保しにくい。
- ❺ 分割した設計・施工によりコスト高となる。

(3) 屋内・屋外空間の一体化

屋外デッキテラス（幅5m程度、上部庇つき）を屋内・屋外をつなぐ空間とすることで、相互利用を促す。また屋外の多目的利用へのニーズが強いことから、屋外遊び場、水遊び場、菜園・コミュニティガーデン、芝生広場、足洗い場、屋外トイレ等を計画する。

また、屋外デッキテラスを「メインストリート」として、屋外側にテナントを配置しつつ、屋内のフリースペースとあわせることで、充実したイベント利用ができるようにする。

敷地利用計画イメージ



敷地利用計画案



3-2 諸室構成

施設の諸室構成は以下のとおりとする。

■屋内

棟 名	室 名	
エントランス棟	多目的ラウンジ	約110㎡
	エントランス・オフィス・情報スペース	約110㎡
	託児スペース（一時預かり）	約95㎡
	親子・多世代カフェ	約100㎡
	子育て・多世代ショップ	約40㎡
	ネウボラルーム	約20㎡
	相談室	約15㎡
	ストックスペース	約10㎡
	小計	約500㎡
中央棟	屋内遊び場・共用部	約350㎡
	ハイハイランド・おむつ替えコーナー・授乳室	約50㎡
	まちライブラリー・図書コーナー	約60㎡
	トイレ（多目的・乳幼児用・男子・女子）	約50㎡
	小計	約510㎡
交流棟	多世代交流スペース・たたみコーナー	約250㎡
	オープンキッチン	約60㎡
	交流・連携室	約60㎡
	ストックスペース	約30㎡
	小計	約400㎡
合計		約1,410㎡

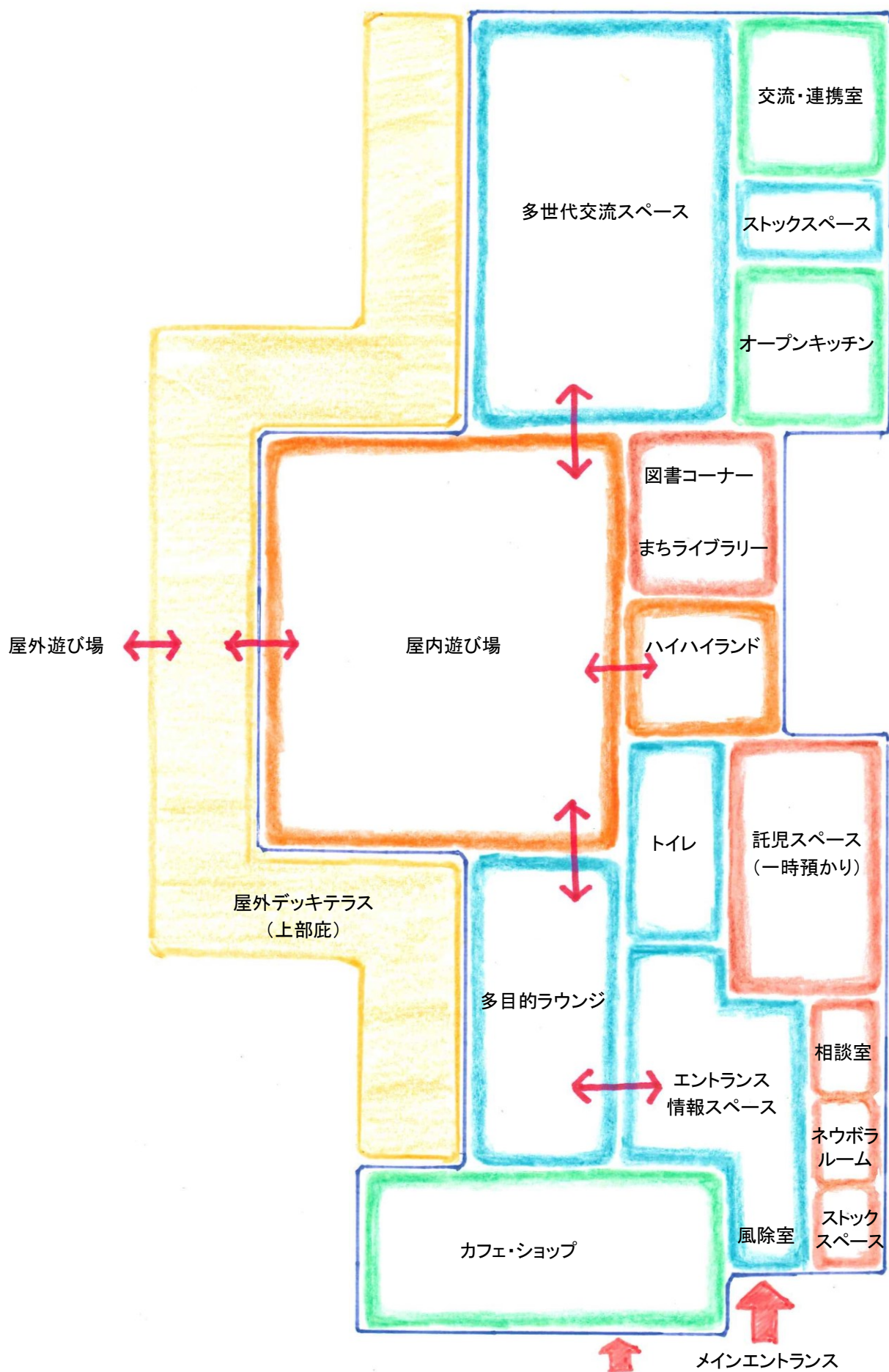
■半屋外

・デッキテラス 上部庇（幅約5m×長さ約75m） 約375㎡

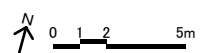
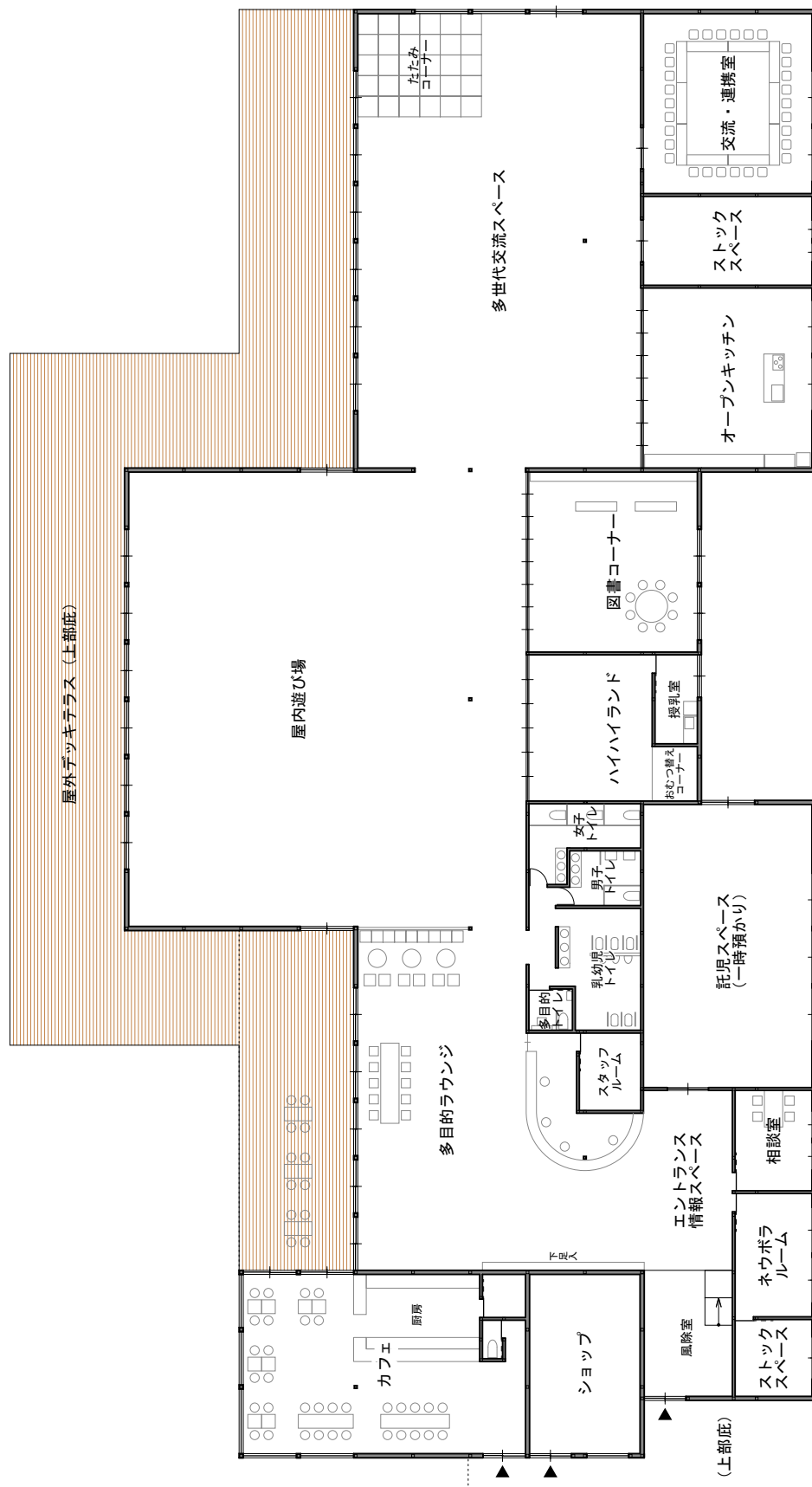
■屋外

- ・屋外遊具広場
- ・芝生広場
- ・コミュニティガーデン
- ・水遊び場
- ・通路・サービスヤード
- ・足洗い場・屋外トイレ

3-3 平面計画イメージ



施設平面計画案



3-4 利用イメージ



春休みには、小学生がお年寄から教えてもらって、昔のおもちゃづくり



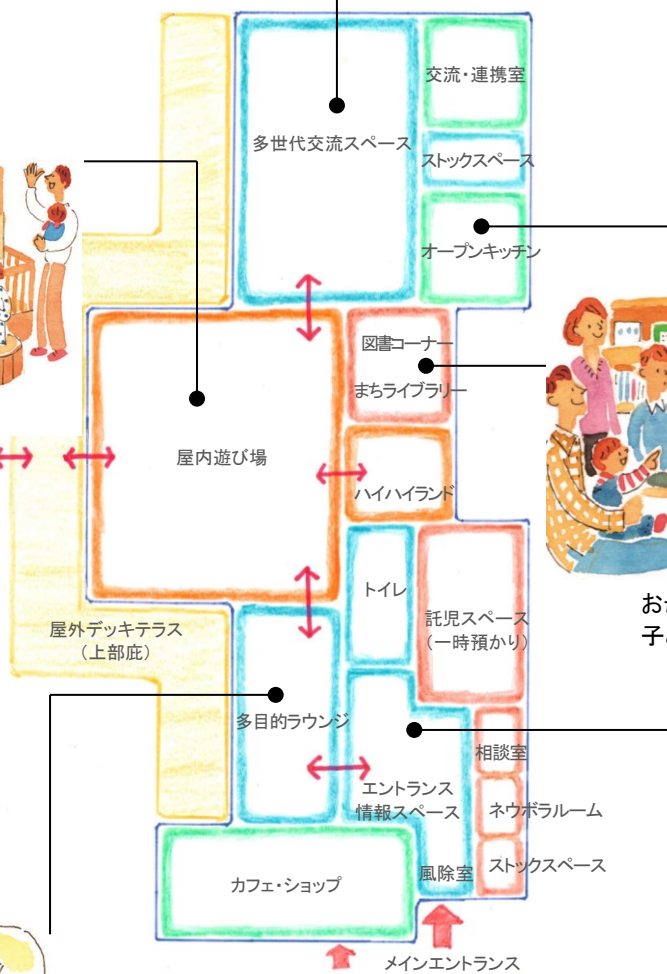
菜園で育てて収穫した野菜を使って、親子料理教室



いろんな遊具があって、思いきり親子で遊べる

屋外遊び場

屋内遊び場



お母さんが、大好きな絵本を子どもたちに読み聞かせ



多目的ラウンジでは、雑誌を見たり、おしゃべりしたり



子育てコンシェルジュに相談すれば、何でも分かるワンストップ窓口

4. 運営計画

4-1 運営方針

(1) 住民との協働

「人を生かし、人を育てる」そして「人と人がつながるコミュニティ」による子育て支援の総合拠点として、さらにはまちづくりの拠点としての役割を発揮していく長期の展望に立って考えると、当初段階から施設運営においては住民との協働を基本とする。

(2) 関連機関との連携

大学をはじめ、保育・助産・医療・保健機関等、町内の多くの関連機関や町内外の民間事業者との連携が不可欠であり、そのことによってより高度な施設運営を目指すこととする。

(3) 行政のイニシアティブ

公共施設として整備するという基本的な考えと、住民との協働、関連機関との連携を構築し、着実に機能させていくためには、運営に対する行政としての理念と手法の確立、コーディネート機能の発揮が求められる。

(4) 持続性のある運営母体

通常の公共施設の管理・運営手法の枠内では、多くの団体やグループ、専門チーム、住民等との協働により、「人を生かし、人を育てる」という目的が達成されにくいことから、協働型の運営の場づくりを基本とするとともに、その中核となる独自の自立運営主体を確立させる方法を検討する。

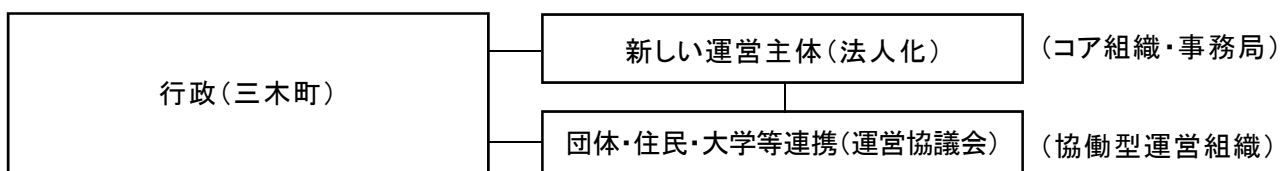
(5) 民間活力の導入

民間活力導入の方式比較検討（PPP=Public Private Partnership の4方式）を行った結果、PFI方式(Private Finance Initiative)、DBO方式(Design Build Operate)、リース+指定管理者方式の本施設での適合性に対する評価は低かった。そのため三木町の「身の丈に合った」、かつ効率的、効果的、現実的な方式の選択と独自方式への進化を検討する。（※参考資料次頁）

(6) 新しい運営主体形成

本施設は、町の子育て支援拠点であるとともに、多くの人がそれを支える取組みが望まれる施設である。さらには、多世代が自由かつ自発的に交流する場であるとともに、町内の福祉・保健・医療・研究・企業等多分野が活動を展開し、相互連携することによって、三木町独自の本来目的が達成されることとなる。そのためには、本施設の目的にふさわしい運営の仕組みが有効かつ必要不可欠と考えられる。

そこで、近年各地で成果をあげている「第三の公共」とされる、自立する公益性を持った組織等運営法人がコア組織・事務局となり、団体・住民・大学等による「運営協議会」とともに運営体制を担う方法を探ることとする。



* 民間活力の導入の可能性検討

本施設は基本的には公共施設であるが、住民と民間の力を生かした事業展開とする可能性を探ることを目的として、民間活力の導入について整理したうえで、三木町にふさわしい建設・管理・運営主体について検討を加えた。

民間活力導入手法は、総称してPPP：官民パートナーシップ（Public Private Partnership）とされる。公共施設等社会資本整備に民間企業の資金やノウハウを活用することで、効率的、効果的に公共サービスの提供を図ることを目的とした手法とされている。

民間活力導入手法PPPの中には、従来から多く採用されている指定管理者方式を含めて、PFI、リース、DBOといった方式があり、それらの比較検討を行った結果、全国各地で事例があるPFI、DBOは、その実施においては、SPC（Special Purpose Company=特定目的会社）設立等、大きな労力と時間やコストが必要とされるため、当施設規模には適さないことや、リース方式は公共負担の軽減にはなりにくく、また町や住民、町内関係機関のニーズ、意欲を生かした運営が難しいことから、「三木町方式」ともいえる新しい運営主体・法人設立による指定管理者方式を探るのがふさわしいと考えられる。

■ 民間活力導入方式の種類

民間活力導入方式		資金調達		設計 建設	管理 運営	施設の所有			評価
		建設費	運営費			施設 建設時	運営時	運営 終了後	
P F I	BOO方式 (Built Own Operate)	民間	民間	民間	民間	民間	民間	民間	×
	BOT方式 (Built Operate Transfer)	民間	民間	民間	民間	民間	民間	公共	×
	BTO方式 (Built Transfer Operate)	民間	民間	民間	民間	民間	公共	公共	×
リース＋ 指定管理者方式	賃貸借契約方式	民間	公共	民間	民間	民間	民間	公共	△
	事業契約方式	民間	公共	民間	民間	民間	公共	公共	△
DBO方式 (Design Build Operate)		公共	公共	公共/ 民間	民間	民間	公共	公共	×
公設＋指定管理者方式		公共	公共	公共	民間	公共	公共	公共	○

PFI方式（Private Finance Initiative）は建設費が民間調達であるなかで、後の施設所有の公・民の違いにより、上表のようにBOO、BOT、BTOの3方式に分類される。いずれのケースもPFI法の制度下で行うもので、そのため長い年月をかけて手順を踏み、SPC設立・運営等に2000万円以上のコストが発生することから、数十億円規模以上の事業向きであり、本施設には適さない。

DBO方式はSPCを必要とするPFI方式に類似し、公共が資金調達を行い設計・建設・施設運営を一貫して民間に委託する方式である。町に資金調達の課題が残り、本施設には適さない。

リース方式は、町が民間企業とリース契約を締結し、民間が建物設計・建設・維持管理を行い、町はリース料を支払う。設計が企業主導で行われること、建物のリース料とは別に運営費は町が負担する点等で難がある。

4-2 運営体制

(1)「第三の公共」となる運営体制——自立する施設を目指して

町の直営、全面的な民間活力導入はいずれも事業目的からして不向きであると考えられることから、公共性を保ちつつ、行政依存ではない経済的にも運営面でも自立した新しい運営体制が求められる。

その具体像については、さらなる検討と実践的な住民の参加、住民との協働の場の創出、関係機関との連携・協議の場を重ねる中から確立することが妥当である。

そのために今後必要な行動を提起すると以下のとおりである。

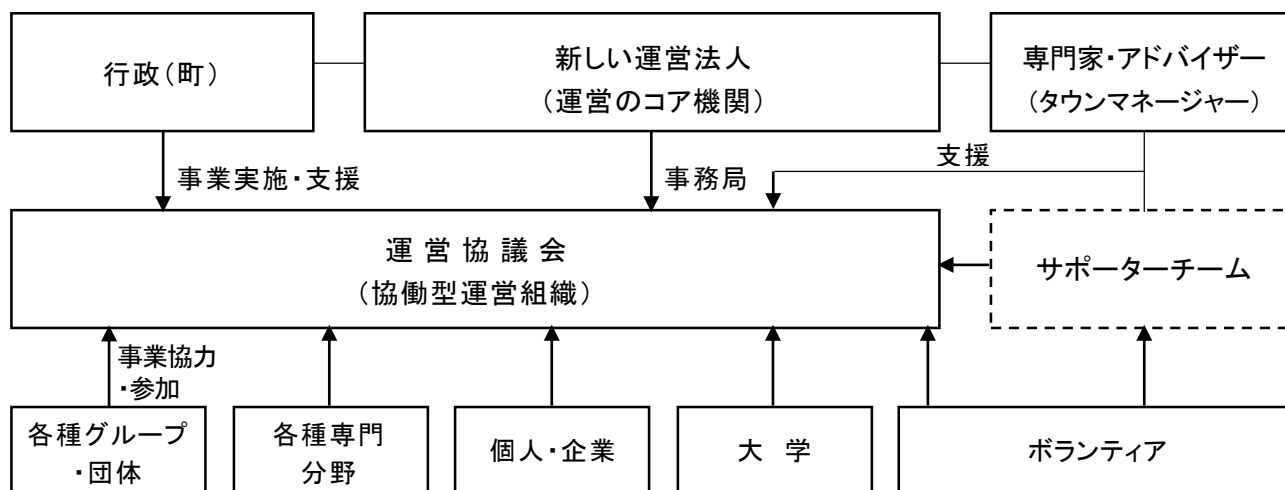
- ①「いきいきパーク(仮称)準備・運営協議会」の企画、設立、運営
- ②コア機関となる「運営法人」の設立準備
- ③ネットワーク形成の具体的な展開(大学、医療機関、保育機関等)
- ④参加型運営の人材発掘、育成、仕組みづくり
- ⑤民間事業者の役割及び業務の確定と事業者の選定・調整
- ⑥大学、助産院、小児科医等との業務提携、事業参画形態の調整、確定

(2)運営体制の全体像

行政、新しい運営法人、運営協議会そして各種グループ・団体・大学・個人・企業の関わり方と相互関係のあり方を「三木町方式」として整理し、その具体化への手順を探ることとする。

新しい運営法人は、運営のコア機関となるとともに、経営面でのマネージメントを主に担うことで、自立運営、協働型運営を可能とする重要な役割を果たすが、実際の活動においては多様な団体、グループ、個人がかかわることが不可欠となる。しかし、それら各主体が連携し、情報を共有するとともに、新しい活動やその主体を生み出す場がないと、本来の目的は達成されない。そのため、多くの先進的・類似事例にもみられるように、以下のような運営システムの構築を検討する。

三木町方式イメージ図



(3) 民間事業者との連携

本施設は屋内・屋外一体となった「遊び場」を子育て支援機能の重要な柱の一つとしていくとともに、サードプレイスや交流・コミュニケーションの機能充足のためにカフェやショップ、さらには朝市やイベントといった民間との連携が効果的と考えられる面を多く持っている。

そこで主な民間事業者との連携方針を以下のとおりとする。

①遊び場運営

近年、民間による有料の遊び場が集客性をみせている事例が少なくないが、本施設は複合機能で、かつ施設内の動きの自由度の高さが求められること、また、いつでも誰でも出入りできるからこそ町民の利用頻度を高められることから施設の有料化は望ましくないと考えられる。

また一方では、公設公営による遊び場のスタッフやボランティアによる、質の高い遊び場運営の事例もみられる。

それらのプラス面をあわせ持つように、民間事業者の遊具・施設やノウハウの提供を受けるとともに、自主運営による質の高い運営方法を検討する。

②カフェ・ショップ運営

カフェ・ショップ部門は、施設のなかで独立したものではなく、「子育て支援」「サードプレイス」「コミュニケーション機能」を促す重要な役割を果たすものである。

同時に、居心地の良さが十分に感じられることによってリピーターを定着させ、さらに拡大していくためには、質の高い空間や商品、サービスの提供が必要となる。そのためには実績、経験のある民間事業者の参画が望ましいことから、本施設の理解・協力者でもある優良事業者を選定することとする。

5. 事業スケジュール

5-1 施設整備スケジュール

基本計画をもとに、計画敷地に関する調査、測量、設計と段階的に施設整備を進めることになるが、順調に進行する場合、平成30年度中に一部開設、平成31年度中の全面開設を目指す。

そのための基本スケジュールは、以下のとおりである。

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	平成31年度中全面開設目標
施設建設	基本計画	敷地関係調査 基本設計 実施設計 積算 調整	施設建設工事 (第1期)	施設建設工事 (第2期)	
備品・遊具等		備品・遊具類の リストアップ、設計 積算	選定 調達	調達	
運営関連	運営計画	管理運営実施計画 協働型運営仕組みづくり	一部開設準備 運営体制づくり 運営法人設立	全面開設準備	

なお、施設建設工事の時期については、国の交付金等による財源確保の状況によって、柔軟に対応するものとする。

5-2 運営体制整備スケジュール

運営関連の基本スケジュールは上記のとおりであるが、本施設計画での運営面からの取り組みは、独自の動きでもあり、多くの主体が関わることから、早期に着手し、きめ細かい工程管理のもとに進める必要がある。

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成30年度中一部開設・平成31年度中全面開設目標
子育て支援の総合拠点づくり	現状分析、事例収集	三木町方式 ネットワーク形成の確立	ワンストップ拠点形成	
運営方式・体制	運営方針の検討	運営準備組織 法人形態検討 運営法人準備	運営協議会設立 運営法人設立	
参加・協働型運営・活用の仕組み	関係者意向把握	人材発掘・育成・仕組みづくり	各分野別チーム編成	
民間事業者・関係機関の参画	ヒヤリング サウンディング調査	民間業務確定 選定・調整 各機関との調整、連携準備	連携体制づくり	

イニシアティブ

「主導権」という意味。率先して発言したり行動したりして、他を導くこと。

インフォメーション

総合窓口となって、知らせ、情報のほか、受付、案内等の役割を担う。

コア機関

「コア」とは物事を中心部、中核の意味で、「機関」とはある目的を達成する手段として設ける組織。コア機関は中心となる組織のこと。

コア機能

「コア」とは物事を中心部、中核の意味で、「機能」とは物の働き、作用。コア機能は中心としての働きをすること。

コーディネート

各種団体や個人の間にとって物事を調整したり、全体をまとめること。

コミュニティカフェ

「地域のたまり場や居場所」のこと。飲食店としてだけでなく、地域の人たちが集まり、交流する場としての役割を果たす。

コミュニティガーデン

「地域の庭」という意味。地域住民が主体となって、みんなで庭づくりから維持管理まで、自主的な活動として取り組むことで、地域に憩いの場ができ、ガーデニングの技術や植物についての知識を学ぶことができる。

コンシェルジュ

あらゆる要望や案内に対応し、必要な相談やサービス提供につなげる「総合世話係」のこと。

サードプレイス

「自宅（ファーストプレイス）」でも、「職場・学校（セカンドプレイス）」でもない、地域の生活者が自分にとって居心地の良いと思える第三の居場所のこと。

サービスヤード

荷物・材料等の搬出入等に用いる空間。

サブエントランス

建物の主要な入口とは別の補助的な入口のこと。

第三の公共

行政だけが公共の役割を担うのではなく、住民、NPO、企業等が積極的に公共的な財・サービスの提供主体となって、身近な分野において、共助の精神で行う活動、仕組み、体制等。「新しい公共」ともいわれる。

ネウボラ

フィンランド語で「アドバイスの場」という意味。妊娠から出産、子育て期にわたって切れ目なく総合的な支援をする場所や仕組みのこと。

まちライブラリー

住民が本を持ち寄ったり、本や共通のテーマを持った人たちが出会い、交流を深めながら「自分たちの図書室」とコミュニティをつくる場。

メインエントランス

建物の主要な入口のこと。正面玄関。多くの場合、動線上、利用者に便利な場所にある。

ラウンジ

交流、雑談、休憩等のために自由に使える場所。本来は人々がリラックスして集まる場所の意味。

リタイアコミュニティ

リタイア世代が趣味や特技を生かして、地域社会のために活動できる場所。

ワンストップサービス

ひとつの場所でさまざまなサービスや情報提供が受けられること。

BOO方式（Built Own Operate）

PFIの事業方式の一つ。民間が施設を建設・維持管理・運営し、契約期間終了後も民間が施設を所有し続ける方式。

BOT方式（Built Operate Transfer）

PFIの事業方式の一つ。民間が施設を建設・維持管理・運営し、契約期間終了後に公共へ所有権を移転する方式。

BTO方式（Built Transfer Operate）

P F I の事業方式の一つ。建設・資金調達を民間が担って、完成後は所有権を公共に移転し、その後は一定期間、運営を同一の民間に委ねる方式。

DBO方式（Design Build Operate）

P F I 方式に類似した方式であるが、公共が資金調達を行い、設計・建設・施設運営を一貫して民間に委託する方式。

PFI（Private Finance Initiative）

公共施設等の建設、維持管理、運営等に関して、民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用する方式。建設、運営時、運営終了後の所有が民間か公共かによって、B O O、B O T、B T O の 3 方式がある。

PPP（Public Private Partnership）

官民パートナーシップ。公共施設等社会資本整備に民間企業の資金やノウハウを活用することで、効率的、効果的に公共サービスの提供を図ることを目的とした手法。

SPC(Special Purpose Company)

特定目的会社と訳され、金融機関や事業法人が保有する資産を証券化して資金調達することを目的として設立する法人のこと。

三木町まんで願いきいきパーク（仮称）整備基本計画

平成 29 年 3 月

発行/三木町

編集/まんでがん子ども課

〒761-0692 香川県木田郡三木町大字氷上 310 番地

【TEL】 087-891-3322

【FAX】 087-898-1994

【E-mail】 mandegankodomo@town.miki.lg.jp